

与えられたる 金剛の一心

(信仰の極致の信巻三心一心の問答)

金剛の信心

生も死も何の心配することなく生きて行かれる。何という有難い救いであろう。大きな大きなみ仏のはからいにまかせて、自然に生きて行く。私はこれでいて南無阿弥陀仏の主なのだ。み仏は、私のこの罪にけがれ、日々の生活に、三毒の業火に自身を焼きつくして生きて行く、その真つただ中に、この業火にも焼きつくすことの出来ない念仏を与えて下さった。刻々に燃えあがる煩惱の大火を念々に治しつつ、み仏の金剛の業力によりて、真実の一道に生きさせたもう。

まことに世間は虚仮である。人間の営みは不実である。私は泥凡夫である。こうした世間に、人間が妻を持ち子を持ち親兄弟と共に暮す在家の姿は、まことに罪にやつれた悪業そのままのあらわれである。苦悩の真つただ中に、人々は運命を傷つけあつて生きている。けれどもこれが人間に与えられた生活相なのだ。

肉食と妻帯。全ての罪の根源はここにある。生きたい、強く生きたい。健康に生きたい。そのために肉食し、活動し、生産する。けれどもそれはすぐ煩惱の熾盛なることを求め、肯定して生きて行こうとするのだ。人間愛の根源は妻帯である。世間種々様々なる愛の紋様は妻帯ということによって織り出される。血みどろな人間苦は、こうした肉食妻帯の内にかもされ、生み出されてゆく。

弥陀の誓願不思議がこうした苦悩の真つただ中にうち立てられてあつたことは、何とも言えぬ有難さを思う。人間は業火の内に深く根ぐみ、苦悩の海のその内からふき出して来る光明絶対救済の勅命を知らずに暮す。

血みどろけの在家の姿こそ、いたましくも地獄の姿である。しかも、その哀れな罪業の相こそ、弥陀如来の本願の五劫永劫の目のつけ所ではないか。やがて光明に摂取される機ではないか。私は自分たちの日常のあさましいことに泣く。けれどもそのあさはかさ、みじめさを知らしめたもうも如来の光明のお力ではないか。

私は昔のようにこの自分をどうしようかと泣きはせぬ。けれども、こうした自分が、かの光明海中に摂取されて、私の機を寸分ためなおさず、改造せぬままに、如来によつて金剛の信力に生きさせたまい、全く仏凡一体にならせたまいし仏恩の高きにむせぶのである。任運無作の自然の自活業のままに生きながら、絶対にはからわせたまい、我が煩惱の満面に火つきたまいし大悲の業力にまかせて、自由の天地に生きさせたもうことに、感激せずにはいられぬ。

人間に真実はない

私はどこどこまでも悪人だ。悪人だと泣きもせぬほどの悪人なのだ。人間の生活に真実などと名づけることはあまりに大それたことだ。

人間には真実はない。

人間がもし真実に生きることによりて目覚めるならば、自分の真実でないことに泣くのだ。

私どもが善人だと見、真実の人だと認むる人は、その人が悪人だと泣いている時なのだ。

自ら高く「天に恥じず、人に恥じず」等言っているのを見たとき、その偽りの大きなことに驚く。私は自ら「自分は真実なり」とうそぶくような以而非善人を作りたくない。

善人とは、善人だと自らゆるす人のことではない。

善人とは、悪人だと自覚することである。

ほんとの善人は、善人だと意識しないで、悪人だと自覚することなのだ。

親鸞様は近頃の何とか派の人たちのように、自ら法蔵菩薩だとか、如来だとか、自ら高くとまった人たちと同じではなかった。十方衆生、罪に汚れ、永劫の迷いに沈潜して動きのとれぬ十方衆生の方に自分を見出された。源信僧都の『往生要集』に描かれた地獄の様は、すぐ聖人の内に内観された地獄であり、有る無しの議論を用いずに、なければならぬ必然の世界であった。そこに悪人、愚禿の尊い自覚があった。善導大師の「外に賢善精進の相をあらわすことを得ざれ、内に虚仮をいだけばなり」とのみ言葉は、親鸞聖人一人への手厳しい師教の鏡であった。

人間は誰でも内の空っぽであることに気づかず、外に虚楽虚飾の衣をつけていることに気づかぬ。内は不実、外は真実、内は愚で、外は賢たることに気づいた時、もはや内に何ものか尊いものを見出した時なのだ。

人間たる我に真実はない。

人間たる我に真実をゆるすなどとは恐ろしいことであり、愚かなことでもある。重ねて言う、人間心そのままの上に真実などという名はゆるされぬ。

でも人間は真実を求める。然り、人間は真実をたずねる。けれども真実を求めていくということは、真実であるということではない。否、真実を求めればこそ、真実を求むる者にもみ、自分を見つめて不真実と泣けるのだ。不真実でない者が真実を求めたこともなければ、真実を求める者で、自分の不真実に泣かぬ者もない。

真実を求める心がないならば、人間の血みどろの歩みはないであろう。

真実を求める心がないならば、安気な生活ではあろう。けれどもそれは禽獣の生活である。

真実に生ききろうとする者にのみ、我は悪人なりとの自覚は生れる。

断じて言う、人間には真実はない。

人間に真実がないとは、我に真実がないということだ。

人間の文化がこの悪人自覚の上に立てられなかった。倫理道徳は自分を善人だとゆるすことを教えて来た。他人は悪い。けれども自分だけは善い道を歩んで来た。と。自分を善人と見れば、他は悉く皆悪人に見える。自分を善人と見て、他を悪人と見る人は永遠に救われぬ。社会も救われぬ。国家も救われぬ。人類も救われぬ。

人間は断じて善人でない。人間は断じて真実でない。人間が「善人だ、真実だ」とうぬぼれることは、恐しい谷底へ落ちて行くことだ。

善人になればなるだけ、真実でない自分に目覚めて来る。

昔からこの心中の賊をもてあまして、悪人だとへり下ったたくさんな聖者がなつかしい。

政治家は政治家で、今の立憲政治をどうにかせねばという。実業家は実業家で、どうにかせねば……。農業家は農業家で、今の農村をどうにかせねば国家の前途が憂いの種だという。それぞれの社会はそれぞれに、現実を厭離しては、より真実の世界に生れ出ようとする。

**静かに真実の一路をたづねて、歩み続けようとする人間生活が嬉しい。**

親鸞聖人が、そんな部分的なことでもなしに、全てをあげて「そらごとたわごとまことあることなし。」と全否定されたところに、絶対真実に進み行つた欣求浄土の真実生活がしのばれる。

人は皆、現実の汚さを見ては、より清らかな世界に生れ出ようとする。

厭離穢土（穢い現実の世界をぬけ出でて）

欣求浄土（浄土をねがい求めること）

人間に真実はない。

人間が自ら善人であるとゆるしてはならぬ。

人間は苦悩、煩惱、愛執の真つただ中に立っている。

ああ、人間に真実はない。人間たる私には、微塵ほどの真実もない。

### 信仰の真髓

人間の心の眼が開くと、世の中に真実が見えてくる。心の眼は真実によつて育てられ開かれる。真実が見えて来た時に、真実は魂の内に与えられる。人間は真実の前に出たら真実になります。美しい出来事の前では誰でも美しい心になります。

私どもは虚偽に泣き、不真実に泣き、人間たる私には真実はないときえ思いきつた断言をしなければならぬことを悲しみます。けれども、この私どもの極重悪人だと泣かねばならぬ心の内に絶対の真実は与えられたのであります。与えられた真実に泣かされたのであります。

私は嘆く。嘆く私の内に絶対真実の仏心はやどつて下さいました。煩惱のままに南無阿弥陀仏にして下されたことに、罪のままが永劫の光と寿の持ち主にして下されたことに、そしてこの南無阿弥陀仏の三世を貫いた、私の善悪や罪業でちつとも変易かわりのない、慈悲一つで大安心に生ききらされることに、涙ぐむのであります。

与えられた真実、与えられた信樂、与えられた往生、私は与えられたことに、この上ない有難さを思いつつ、常に親鸞聖人様の信卷三心一心の問答に、深い深い味わいを取らして頂くのであります。まことに三心一心の問答こそは画龍点睛であります。眼目であり、最初であり、最後であり、智慧の究極であり、大慈大悲の真実の表現であり、その真髓であり、聖人の上に輝きたもう大悲の光明であり、一句一句が聖人の生命、血潮のほとばしりであります。否々、一切宗教の帰着点で、信仰生活最上の告白であります。私はここに新しく、私の小さい智、細い眼を通して、否、赤裸々になつて、親鸞聖人の胸に抱きつき、如来大悲の熱涙に接しなければなりません。

### 三心一心問答

(本文)

「問如来本願已發至心信樂欲生誓何以故論主言一心也。」

(読方)

「問ふ、如来の本願すでに至心、信樂、欲生の誓を發したまへり。何をもつての故に論主一心というや。」

(字義)

(1) 如来の本願。阿弥陀如来四十八願の内第十八願のことである。その願文はこうである。

「設我仏を得たらんに、十方衆生、至心に、信樂して、我国に生れんと欲し、乃至十念せんに、若し生れずんば正覺をとらじ。唯五逆と正法を誹謗するをば除く。」(いわゆる、念仏往生の願)

(2) 至心。至誠の心、真実の心、如来のみ心。

(3) 信樂。信心決定の心。如来の衆生を救いたもうことに疑いのまじらぬみ心。

(4) 欲生。如来が、あらゆる衆生に、我が国に生れんと思えと招き寄せたもうた喚声である。阿弥陀如来の招喚の勅命である。

(5) 論主。天親菩薩のことである。

(6) 一心。真実信心の一心。金剛の一心。

(講義)

これは第一問答の問いである。阿弥陀如来の第十八願には、至心、信樂、欲生の三信をたてていられるに、天親菩薩は「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」と一心と言われたが、何故に三心と言わずに一心と言われたのであろうか。

けだし、十八願文に於ける阿弥陀如来のみ心は、十方衆生の神魂たましいの内に、至心に信樂して、安樂国に生れんという心をおこさせて、救つてやるとのおぼしめしであります。この至心で、信樂すなわち疑いなく信ずる心、生れんと思う心の三心をおこさせて、私の方ではおこして、往生すべきものが、天親菩薩は、「一心に阿弥陀如来に帰命したてまつる。」と言われたが、実に重要な問題であります。

その答

(本文)

「答愚鈍衆生解了為令易 阿弥陀如来雖發三心 涅槃真因唯以信心 是故論主合三為一歟」

(読方)

「答ふ。愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがために阿弥陀如来三心をおこしたもうと雖も、涅槃の真因はただ信心をもつてす。このゆへに論主三を合して一とせる歟。」

(字義)

(1) 愚鈍衆生。愚かなる衆生。

- (2) 涅槃。仏となるさとり。  
(3) 真因。真実の因。さとりを得るほんとの因。  
(講義)

何故一心と言われたかという問いに答えて曰く。つまり、愚なる衆生の承知合点の出来易いようにするためにそう言われたのである。阿弥陀如来は、本願文に於ては三心と分けてお誓いなされたけれど、涅槃のさとりを得ることの出来る真実の因は、ただ信心一つである。だから天親菩薩は三信を合して一心とせられたのであろう。

(講話)

全て経典を研究的にのみ見ている者には、ただ生命のぬけた解釈はあるが、独自の生命の開拓はない。自己にのみ立脚する者は、古聖賢の教えを味わい得ず、真実に古聖賢にふれて自分を育てることを知らぬ。私どもはこの短い聖人の文章の内に見のがしてならぬ二つの事実を認める。

(1) 一つには聖人の信仰を、赤裸々に、大胆に表していられることである。即ち、「涅槃の真因は唯信心をもつてす」という一句である。これは聖人の信仰経験の全体であり、強い断言である。ひいてこれが浄土真宗の主眼である。信心は疑心の反対である。疑うことによつて迷い、信ずることによつてさとり。人間は実に、明と暗との分岐点に立っている。光明か暗黒か、それは、信と疑との二つによつて決定する。

ただここに言う信ずるとは、動き易き迷い易き人間心に打ち立てたる、単なる信心ではない。絶対不変の金剛の仏心の内に流れたもう一心が、そのまま我がものとなつた信心である。み仏から下された信心である。この如来廻向の信心こそ、涅槃の妙果5を得る唯一つの大道である。実に信仰はこの一言につきている。

聖人は信巻の序に、

「然るに末代の道俗(道は僧侶、俗は俗人)近世の宗師、自性唯心に沈んで浄土の真証を貶し、定散の自心に迷うて、金剛の真信に昏し。ここに愚禿積の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家釈家の宗義を披閱し、広く三経の光澤を蒙りて、特に一心の華文を開き」とある。

何という権威ある大宣言であろう。この一文こそ従来の道俗、宗師等、全ての宗教に対する一大鉄槌である。自性唯心とは「仏と言うも、極楽というも、我が内にあることである、この心以外にあるわけでない」という説である。在来の自力宗、華嚴、天台、真言、禪など全てがそれである。定散の自心とは、定善の心、及び散善の心である。定善とは哲學的のさとりであり、散善とは道德的の善によつて仏になろうという自力の心である。

かかる一般の人たちに向つて「浄土のほんとの証をけなし……自力の心に迷うて、金剛の真信にくらし。」とは思いきつたる大胆な革命ののろしである。迷いに対するさめよの獅子吼である。特に「ことに一心の華文をひらく。」この一心の華文とは、天親菩薩の『浄土論』のことである。聖人は実に、釈尊の真説即ち『大無量寿経』を信順して、「如来の世に出でられた所以はただ弥陀の本願をとかんがためである」と言い、更に、龍樹以下、七高僧の宗義を一一閲読吟味なされたが、特にこの天親菩薩の

『浄土論』を一心の華文とまでおほめになり、この天親菩薩の一心を徹底的に味わうことによつて、聖人自身の信仰を獲得せられたのである。

(2) 二つには上来説き来つたが如く、親鸞聖人は、あくまで古聖賢の教に忠実であり、いやしくも祖師によつて、とるべきものは必ずこれをとつて、十分に咀嚼して我がものとせられたことである。咀嚼することなく、たとえ名説たりとも、高い教えであらうとも、これを鵜呑みにするならば、それは盲信であり、盲従である。魂の亡んだ者のすることである。わが聖人は、祖師の教えに忠実であると共に、極めて大胆であり、蜘蛛の食つて直ちに糸にするが如く、師教を自己のものとして咀嚼消化して、全く自己の血とし肉とせられた。

涅槃の真因はただ信心一つである。この一大宣言が根本となつて、天親菩薩の一心と言われた心持ちが解釈されてある。如来が十方衆生救済のためには三心を誓われた。けれども十方衆生に如来が招喚の勅命を發したもう時、ただ金剛の一心である。そうして私にとどいた時の純粹なる衆生の心想も亦金剛の一心である。この一心であることは愚かな衆生に極めて解り易いことである。ここに易行他力の大道が開かれる。さとりに入る道、それはただこの如来廻向の賜わりたる金剛の一心である。然らば何故に三心は合して一心となるか。

## 世間

本年一月、二月の両月間に、二億数千万円の輸入超過を見せています。二ヶ月間に6日本品が外国に売れた高と、外国から買い込んだ高との差が、二億数千万円とはおどろきます。かくして日本の血液は海外に出て行きます。奉公の誠、たとえ半紙一枚でも始末よくして、帝国の前途を憂うるの人となりた。帝都の復興、外債の募集、国会総選挙、外交問題、社会主義的運動、本願寺の議會解散、世間は漸次多忙、国家の前途多難、国民は摂政宮殿下の御聖旨に副い、国民精神の涵養振作に努力せねばなりません。

怠る者と贅澤な者とは必ず貧に苦しみます。怠けてはなりません。贅澤をしてはなりません。貧民窟に行つて見ますと、お稲荷さんや、お大師さんや、お胡子さんや、み仏様や、種々雑多に祭つています。病氣の時は何神に、眼の悪い時は薬師如来に、金儲けは福の神に、かくして彼らは運命論的な哲学者になつて、迷いの迷いの底があるな姿になりはてるのです。八卦で行動したり、辻占で運勢を見たりして動くほどの亡者になつてはなりません。如来のみ救いはそうした迷いをやぶつて下さる、我が内に白熱して下さる力、それは如来廻向のものであります。

世間に立つ。どんな時にも失望落胆してはなりません。つまらぬ邪神をたよりにしてもなりません。きつときつと強い念願をもつて立ち上らねばなりません。私は何方にも常に差し上げます。「念願は人格を決定する。」「継続は力である。」「七ころび八起きして、この人生を渡つて行きます。苦を背にして樂を追えば、苦は重荷となつて我が後を追います。苦へと突き進む時、苦は案外重荷ではなくて、樂は後から我を追うて来ます。」

## 質疑応答

問 お尋ね申上げます。二月号の第三十三頁の第二行目に「疑いある者は疑いぬくがよい。」とあります。これはどういう意味ですか。聖人は「よき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり。」と申されますが、疑いある者が疑いぬけばどうなりましょうか。御たづね致します。(樋口生)

答 信仰問題は、ただ知ればいいのではなく、凡夫の心の満面に、如来大悲の温き血があふれて下された風光で、金剛の信心にならして頂くまでには、色々な疑いのおきてくるものであります。全て学校などでは、よく不審の出て来る子供は優等児にかぎります。疑いは問題解決の第一歩であります。疑いのないところに解決はありません。疑いのあることは、おそろしいことでも悪いことでもない。ただどこまでもその解決を求めないのが悪いのです。疑いある者は、解決を求め、更に疑いがあれば解決して、そうしてついに最後まで行く時、解決さるべき問題は解決しつくして、人間の智慧の最後の行きづまりに到達した時、如来の招喚勅命は我がものとなります。疑いある者は決してほつておいてはなりません。疑いがなくなるまで疑いぬいて、解決を求めねばなりません。

問 法蔵菩薩が五劫に思惟し、兆載永劫に修行したといいますが、兆載永劫とはどの様なことですか。

答 兆載永劫とは永遠の時間ということ。数の一十百千万億兆京核柿依講潤正載、以上二十三数の内、兆と載とをとったものです。非常に永い時間のことであります。一劫とは四十里四方の岩を三年に一度、天女の羽衣でなでて、なくなった時のことです。